

# アジア太平洋研究科 博士学位論文要旨

## トランス・ナショナル化した日本人ビジネスパーソン

—中国でビジネス・生活をする移住者たち—

学籍番号 4011S013-1

堀内弘司

主指導教員 天児慧教授

**Keywords:** トランス・ナショナリズム, 国際移住, エクスパトリエイト, 和僑, SIE, 中国ビジネス, 生きがい

### <研究背景/目的>

本論は、急速に発展する現代中国に移住する日本人ビジネスパーソンに焦点をあてて、彼らがどのように「国の枠組み」を超えトランス・ナショナル化し、社会とどのような相互作用をおこして社会をトランス・ナショナル化させているのか、を中心的な課題として探究し論じるものである。

社会学は A・コントや H・スペンサー以来、長年にわたり社会変動について論じてきた。こうした社会変動の重要なファクターのひとつとして、移民が位置付けられる。20 世紀には、膨大な「貧困な発展途上国から、産業振興などで労働力を求める富裕先進国に向けての移住者」に焦点をあてた研究がおこなわれ、移民現象を説明する理論が生成されてきた。いっぽうで本研究は、21 世紀になるにかけて起こったグローバル化の潮流の中で「成熟し成長が鈍化した富裕先進国から、発展途上国に国際移住する人々」という、従来とは逆の流れの国際移住について焦点をあて、従来から用いられている移民理論を参照しながら、現代の国際社会変動の一面を分析し論述する。

冒頭に挙げた中心課題を探究する、具体的な研究の問いには、彼らの「移住の動機・メカニズム」、「異文化社会適応のストラテジー」、ならびに「国際移住者がもたらす社会変動」がある。また、中国語も喋れないのに本社命令で来る駐在派遣員は「言葉の壁」にどう対峙しているのかという問いもある。本論は、中国に移住した日本人ビジネスパーソンたちから得た emic なビジネス・ライフ・ストーリーに関する語りのデータと、筆者自身の 1 年半の中国居住で得られた参与観察結果からグラウンディッド・セオリー・アプローチで、問いに対する説明理論の生成を試み論述する。

また、本研究は中国に越境した日本人の SIE (Self-Initiated Expatriates) に関する、初めての大規模な質的研究成果である。

### <研究結果>

2009 年から 2013 年にかけて 3 回のフィールド調査活動をおこなった。筆者自身の合計 1 年半の中国居住生活で経験をした異文化社会適応の参与観察データと共に、142 名のビジネスパーソンにインタビューをおこなうことができた。その研究結果を本論の第 2 部「事例研究」にまとめた。

本論の第 1 部 (第 1 章～3 章) には本論の「理論的背景」として、本研究の研究視座と先行研究の諸理論、研究アプローチ方法について記した。ベック(2005)らは、グローバル化時代の社会学を探究するには、従来のように国民国家ごとに分けられた複数の国家社会から世界が成り立つというイメージの虜となるべきでない論じる。その狭間にあるカテゴリーについても目を向けて、現代グローバル社会を見据える探究が必要だという。本論は、中国に在住する日本人ビジネスパーソンに焦点をあてて、彼・彼女らの「国家の枠組み」を超えてトランス・ナショナルなビジネスと生活を記述し論述をする。

第 2 部には、本研究のフィールドについて (歴史ならびに文化・制度の規範) を記述し(第 4 章)、本論の研究の問いに対する、事例研究の研究結果を記述した(第 5 章～8 章)。

「移住の動機・メカニズム」については第 5 章に記述した。1990 年代半ばにおこる経済・社会変動が作用していた。それまでの日本は「1 億総中流」や「Japan as No.1」と呼称されるほど豊かであったが、突然にバブル経済崩壊で、若年就業者がキャリアの充実(働きが

い)を満たせる環境が激減した。いっぽう、中国はこの時期から急速に「右肩上がり」の経済・社会成長をしていく。こうした中で新中間層市場も増え、外国人も増えていく中国に越境する日本人たちが観察された。日本では得づらいキャリアの充実(働きがい)や起業チャンスを、日本人移住者たちが得ている様相が発見された。

新興国社会で、起業チャンスを得たとしても、母国と異なる文化・規範の中で、さまざまな問題も起こるはずである。こうした中で彼・彼女らは「異文化社会適応のストラテジー」を経験から構築していく。文化摩擦から生じる従業員の大量辞職、幹部の疾走、行政担当官からの賄賂要求の軋轢などの問題に、彼らは経験を通しながら対峙・克服していく様相が観察された。また、メーカー営業における販路拡大のストラテジーも観察された。彼・彼女らの中国ビジネスの根幹にある鍵概念は「中国のことは中国人に任せろ」というストラテジーであった。これは中国語が喋れない「言葉の壁」を持つ日系企業の駐在管理者も同様であった。この研究結果を第 6 章にまとめた。

彼・彼女らの中国大都市での生活の様相を第 7 章にまとめた。毎日日本料理を食べ、日本のテレビを見て、日本の祖父母と孫がテレビ電話をする、トランス・ナショナルな生活環境が観察された。中国が米国に次ぐ世界第 3 位の外国人訪問国になっており、外国人たちが快適に暮らせる環境が中国の大都市では整っている。「国際移住者がもたらす社会変動」が消費・生活を中心に起きていることが観察された。

なお、溝口雄三(2005)が『中国の衝撃』の中で、内陸部から沿海部大都市に大量の労働力が「盲流」し、その潤沢な労働力を求めて日本や台湾の製造業が「吸い寄せられて」いる様相を描いたが、本研究では、多国籍企業の工場だけでなく、成熟化した先進国の若年就業者らや、アフリカ諸国などの中国を手本とする国・地域のエリートたちがチャンスを求めて“中国に向かってくる”様相も描いた。また、本研究で発見された、21 世紀の国際移動の動向やあらたな移民カテゴリーについての論考を、第 8 章のむすびにした。

中国在住日本人は 15 万人もおもりに米国に次ぐ。日系企業の駐在派遣者数では、米国よりも中国駐在者の方が圧倒的に多い。本研究は 142 名のインタビュー以外に、多くの日本人ビジネスパーソンと出会い、また一緒に在住する伴侶や子どもたちとも出会い話を聞いた。こうした数を合わせれば 500 名を超える人々と出会った。

今まで国際移住者研究の中で光の当たってこなかった中国在住の日本人たちのビジネスや生活の様相を素描し考察するものとなった。

従来の国際移住者研究の対象は「貧困国社会⇒資本主義先進国」であり、労働移住者を中心であった。本研究はそうした中で、「成熟化した先進国⇒経済急成長する新興国」の、起業家や多国籍企業の経営幹部(エクスパトリエイト)の国際移住の様相を素描し論じた。

本論の研究成果は、21 世紀の国際社会変動の様相の一面をあらわし、国際移住者研究に貢献するものと考えられる。

### [主要参考文献]

ベック,ウルリッヒ(2005),『グローバル化の社会学』(国文社)  
カールズ&ミラー(2011),『国際移民の時代』(名古屋大学出版会)  
コーエン,ビン(2012),『グローバル・ディアスポラ』(明石書店)  
林吉郎(1994),『異文化インターフェイス経営』(日本経済新聞社)  
溝口雄三(2004),『中国の衝撃』(東京大学出版会)